

森下雨村探偵小説選Ⅱ
目次

三十九号室の女

*

四ツの指環ゆびわ

博士の消失

耳隠しの女

幽霊盗賊とうぼう

深夜の冒険

三ツの証拠

喜卦谷君きげやに訊け

黒衣の女

243

227

217

204

186

170

162

148

2

四本指の男

.....

305

珍客

.....

327

評論・随筆篇

シヤグラン・ブリツヂのあそび方

.....

340

探偵作家現はる

.....

350

探偵犯罪考

.....

355

探偵小説の見方

.....

369

悪戯者

.....

371

【編者解題】

湯浅篤志

.....

373

森下雨村小説リスト（湯浅篤志・編）

.....

384

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」(昭和六一年七月一日内閣告示第一号)にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

創作篇

三十九号室の女

夕刊の隅から隅まで目をとおして、そろそろ居眠りをしかけていた須藤千代二は、大きな欠伸を一つすると、物憂さそうに後の窓を振返った。外はよく見えないが、どうやら雨はやんだらしい。

(どれ、そろそろ出かけるとするかナ)

彼は手にした新聞を傍へ置いて、今一度欠伸をしながらかいた。が、考えてみると、そこを出て、さてどこへ行こうとの目的もない彼だった。下宿へ帰っても話らない、といって懐中の寂しいのに、今時分のこのこと銀座へ出かける勇気もなかった。

(帰ったって仕様がなし、明日は日曜だが——)

そうなると、せっかく起ちかけた腰が、また重くなつて、例の憂鬱が、ムクムクと頭を擡げる。

先生のお庇で学校は出たが、——そしてやつとのこと弁護士試験にも合格はしたものの、彼はその弁護士という商売が、どうにも虫が好かないのだ。それも最初はそんなでもなかったが、先生のところへ出入りする有象無象の連中を見ている中に、弁護士という商売がつくづくと浅間しくなってしまうのだ。で、学校にいるころから、きれいに足を洗つて、自分の好きな記者生活に転身しようと思つたことも、一度や二度ではなかったが、——先生にはこつびどく、呶鳴りつけられ、一方、就職を

一

運命の拡声機

——十時五十五分発、神戸行二三等急行！ 十時五

五分発、神戸行二三等急行！！ 国府津——沼津——静岡

——浜松——京都——大阪——神戸行！！

入口の拡声機が、また大きな声で鳴り出した。と、ほんの数秒、シーンとなった待合室が、急にまたガヤガヤと騒めき立って、トランクや雨傘をもった人々が、ぞろぞろと入口の方へ歩き出した。

(もう、一時間も経つたかなア——)

頼んだ新聞社の友人からは、あつさりと説諭せつゆされて、とうとうずるずるになってしまったものの、といって、今でもまだ弁護士の手書で、飯を食おうなどは決して思つてはいないのだ。

だから、今夜も関西へゆく先生を見送つたついでに新聞社の友人を訪ねてみようと思つていたのが駅へ着くところの土砂降りである。おまけに夜勤のはずの幡谷ばんやが、今日は夕方ちよつと顔を出しただけで帰つていったとのこと、そのまま待合室で雨宿りをしている中に、いつの間かこんな時間になつてしまつたのだ。

(あああ——)

彼は三度目の大きな欠伸と一しよに、思い切つて立ち上つた。そして入口の方へ向いてぶらりぶらりと歩きかけた。と、彼はふいにハツとなつて足を停めた。

「須藤さーん。須藤千代二さーん。お宅から急用です。至急、案内係までお出で下さーい」

音叉おんさのように、広い室内に響きわたる拡声機が、突然、彼を呼びはじめたのだ。

「須藤千代二さーん、——至急、案内係へお出で下さい。おい。お宅からお電話です」

彼は顔を上げて、拡声機を睨んだ。それから須藤千代二という言葉に、呼吸いきをつめて耳をこらした。はじめは、

何だか津藤と聞えたようだったが、二度目は確かに須藤であつた。

間違ひなく、自分を呼んでいるのだ。

(でも、誰が、何の用があつて呼んでいるだろうか?)

お宅というから変である。下宿ではあるまい。といつて、先生のお宅にしても、自分が東京駅に知っていることを知つていようはずがない。もしかすると、何か変事でも出来て、事務所へ問い合した結果、先生を見送つて行つたらしいと知れて、万一を頼んでこんな方法をとつたのだろうか?

一、二等待合室から案内所までの短い距離を、駆けるよう急ぎながら、彼はそんなことを考えた。

「ああ須藤さんですか。津藤々と聴えたものですかね。若い女の方のようですよ」

額のひどく禿はげ上つた案内係は、そういつて目の前の受話器をとつて渡してくれた。

「誰もいませんでしたか先方は?」

若い女と聞いて、須藤は受話器を受取りながら訊き返した。

「ええ、誰方どなたともいわれませんでしたよ。何しろ、ひどく急せぎこんでいられたようですから」

その返事を半分聞き流して、彼は電話器へ獅嚙しがみつい

た。

「モシモシ、あ、モシモシ、モシモシ」

いくら呼んでも返事がない。しかし、雑音が入るところを見ると、切れてはいないのだ。すると受話器をおいで引込んでしまったらうか。

「モシモシ、あ、モシモシ」

彼が今一度、繰返して呼んだ時、電話の彼方でふいに帛を裂くような声があった。確かに女の声だった。

「あッ！」

思わず叫びを洩らすと、彼は受話器をぎゅつと耳に当てて、呼吸を呑んだ。

「どうか、したのですか？」

顔色を変えて、受話器を握りしめた須藤の様子を変に思ったか、案内係が振返った。

「いや——その——」

須藤は碌々返事もしないで、右手を伸すと受話器の鉤をやけにガチャガチャと叩き出した。

「切れましたか？ 交換手を呼ぶなら、僕が呼んで上げます——」

省の器物は大切に取扱うべし——服務規定に、そんな文句があるのだろう。案内係は洗面をして、須藤の手からもぎとるように受話器を取った。

「じゃ、今の電話がどこから掛ってきたか、訊いてみてくださいませんか。もう継がんでもいいのです」

「あ、モシモシ、こちらは案内係だがね、先刻の電話——今、案内へかかってきた電話さ。話をしない中に切れたんだよ。——ああ、番号を調べてくれたまえ。そう、むろん公用——至急にね」

須藤の驚いた顔を、恐らく他の意味にとつたらしい、案内係は親切にそう訊いてくれた。が、その返事の来るまで、須藤の心臓はまだドキドキと波打っていた。

「ああ、そう。どうも有難う」

案内係ガチャリと受話器をかけると、

「丸の内の××番だそうですね。御存じですか、××

×番は東京ホテルですよ」

「えッ！ 東京ホテル？」

「そうですね。だから電話ですむ用事だが、何だったらお出でになる方が早いでしょうよ」

そういつて、机に向いた案内係の顔を見ながら、須藤はぼかんとなってしまった。

一体、これはどうしたというのだ？

場所もあるうに、あの東京ホテルから、——豪華と高慢のあの建物のどこから、どんな女が、どんな理由で、——それも一面識もないはずの自分を呼んだりなんぞし

ただらう？

しかも、その女は、——あの声は——。

二

「電話がかかつてきた時、女の人は何かいってしましたか？　ただ、僕を呼んでくれというだけでしたか？」
案内係の前を去ろうとした須藤が、ふと思いついたように訊いた。その声も、態度も、もうすっかり平静に復つていた。

帳簿から目を上げた案内係が、まだいたのかというようにな顔をして、

「そうですね。何でも生命いのちに関かかわることだから、至急にといいことでしたよ、——大抵たいてい、ここへ掛つてくる電話は、危篤か、火事か、まあ普通じゃありませんよ」

「いや、有難う。とにかく、ホテルへ行つてみましょう」

須藤がそういって、グイと帽子を冠かむった時、背後からポンと肩を叩いたものがあつた。

「何をきよろきよろしてるんだい。また弁護士いんぎが嫌いやになつて、満洲行まんしゅうこうの旅費でも訊きに來たんじゃないか？」

「やア、君か！」

振りかえると、帽子を横よこちよに冠かむったレインコートの背の高い青年が、ニコニコしながら立っていた。友人の、新聞記者の幡谷である。

「先刻、君の社へ電話をしたんだよ」

「そうかい。それは失礼——今日は中央亭で県人会があつたんで、怠なまけたんだよ」

「で、これから社へ行くのかね？」

「いや、もう家へお帰りだ——」

「じゃ、僕と一しよに來たまえ」

「どこへ行くんだ。僕はもう食い気けはないよ」

「そんな話じゃないんだ。事件だよ」

「事件？」

幡谷の眼がきらッと光つた。

自動車くるまが走り出すと、幡谷が訊いた。

「驚おどろくなよ、——」

須藤が急に嚴肅げんしゆくな顔をして、幡谷の耳に口を寄せた。

「たつた今、ホテルで女が殺されたんだ！」

「へえ？　ほんとか、それは？」

幡谷の顔が引きつるように硬張こわばつた。

「どうしてそれを知つたんだ？　で、女は一体何者だね？」

「それがさ、実に不思議でならないんだよ。僕、先生を送って、待合室で雨宿りをしていると、突然、拡声機で僕の名を呼ぶので、電話口へ出てみると、何とも返事がないんだ。で、怪しいと思っていると、ふいに、何とつか帛を裂くような、——絞め殺されるような——」

「つまり悲鳴だね」

「そうだ、それも尋常の悲鳴とは違って、たしかに殺られた声なんだ。で、はっと思うと、何かが机の上からでも落ちるような音がして、それからドサツと人の倒れる音なんだ。その後が、呻きというかな、ウーンと落ちこんでゆくような声だ——と思つたら、電話が切れてしまったのだ」

「どうして切れたんだろう？」

「向うで切つたんだ。誰かが、まあ恐らく犯人だろうよ。ガチャリと受話器をかける音が、はつきりと聞えたから——」

「なるほど」

幡谷はちよつとの間、腕を組んで考えこんだ。が、すぐ須藤の方へ向き直ると、

「それで君は、そんな女に知己はないんだね？」

「ないよ。知ってる若い女といやあ、君も知ってるあすこの連中くらいなんだ。ホテルへ宿りこむような女に

知己は絶対にないよ」

「そうだね、君のことなら、——すると、今引つかかっている職業の方で、誰かそんな女はないかね？」

「女の関係するような艶っぽい事件なんか、僕のところじゃ扱わんよ」

「すると、いよいよ怪しいが、——もしかすると誰かの悪戯じゃないかな？」

その時、ホテルの玄関に自動車が停つた。

表の舗道に自家用の自動車や、タクシーが一ぱいに列んで、美しく着飾つた婦人が四五人、ぞろぞろと彼等の前に現われた。何かの披露会でもあるのだろう。だが、二人にはそんなものは目につかなかつた。

「僕が口を利こう。どうせこくだって客商売だからな」

幡谷は心得顔に独り言をいいながら、正面の玄関をかけた上つた。上つた奥が大食堂の囲い石になっていて、直ぐ左手に事務所がある。

「ちよつと支配人に取次いでくれませんか。新聞社の者ですが」

幡谷が名刺を出すと、事務所の男が、

「御用向は？」と訊いた。

「お目にかかつてから申上げるといつて下さい。ちよと重大な用件ですから——」

事務所の男が、支配入室へ電話をかけると、恰度、こちらへ来るところだから、暫らく待つてくれるようにとの返事だった。

それから五分と経たないのに、食堂の横の廊下から格幅のいい、半白の、口髭をきれいに刈りこんだ白チヨツキの人物が、急ぎ足に現われた。

「お待ちせして済みませんでした。犬山でございます」
 幡谷の名刺を片手に、腰を低く、上品に挨拶する犬山支配人を、須藤は感心して眺めていた。

その犬山支配人は、四辺を憚るように低声で話す幡谷の言葉を一語も聞きのがすまいとするように肩をひそめながら、熱心に聞いていたが、その顔には見る見る困惑の色が浮かんできた。しかし、さすがに狼狽したような様子は、顔にも態度にも見せなかつた。

「それはどうも、有難うございました」

幡谷の話が終ると、支配人は鄭重な言葉でそういつて、一度事務所の卓へ身体をまわしかけたのを、また二人の方へ向き直つて、

「しますと、まず第一に、そういう電話をこちらから東京駅へかけたかどうかを確かめ、もし掛けたとすれば、何号室からだったかを調べなくてはなりません……ではちよつとお待ち下さい」

支配人はそれから事務所の男に、二言三言何ごとか命じた。そしてその男が、背後の硝子の仕切の中に入つてゆくと、支配人は目の前の卓上電話を取り上げて、

「あ、交換台だね。こちらは犬山だが、先刻——そう十時四十五分過ぎに、ホテルから東京駅へ電話をかけたかね？……そう、かかっている。すると部屋の番号は？」

「三十九号室でございます」

澄んだ、きれいな交換手の返事の声が、受話器を洩れて、側にいる須藤の耳へ小さく聞えた。

「それではね、その部屋へ、私からだと申上げてつないでみて下さい」

支配人は受話器を耳に当てたまま、右の手で、卓の一方にひろげたまま置いてある大型の宿泊人名簿を引寄せ、白い大きな指先で、三十九号室をさがして行つた。

支配人の指先の止つたところには、

佐々木 百合枝 二十六歳——

そして下の肩のところ、名古屋市南区直来町××番地、それに止宿の時間は、その日の正午と記してあつた。字体は使いなれたペン字だが、しかしこんなホテルへ泊る女にしては、チト下手過ぎると須藤は覗きながら考えた。

「モシモシ、犬山です。え？——あ、そう。ではよろしい、有難う」

支配人は受話器をかけた。今度の交換手の返事は、須藤には聞えなかった。が、三十九号室へ、電話が通じなかつたことは間違いない。

「いや、お待たせしました。それでは、どうかこちらへ——」

支配人は床を見つめるようにして、先に立った。が、三步と歩かないのに、事務所を振返つて、恰度、硝子の仕切から出て来た男に、

「ちよつと用事が出来ましたからといって、河本さんを捜して、私の部屋へ来るようにいつてくれたまえ。急いでね——」

いいますで、先に立つ支配人の後につつきながら、幡谷が須藤の横腹をつつきながら囁いた。

「おい、本物だぞ。今、支配人が呼べといった河本とこののは、ここへ来ている警視庁の高等係だぜ——」

三

三人が支配人室にいた時間は短かつた。

支配人が二人に対して、それも主として幡谷の職業に対して、こんな事件が起つた場合、ホテルがどれほどの損失をうけるかということ、世馴れた言葉で婉曲に訴えているうちに、もう河本高等係が来てしまつたのだつた。

高等係は、肩中のひろい、がっしりとした、円顔で目の大きい人物だつた。幡谷の方では知っていたが、先方ではその顔に見覚えはないらしかつた。

支配人は、二人を紹介して、一通り事の次第を語つてから、

「それで、一応電話はしてみました、ベルは鳴りませんが、誰も出ないというんです。それで部屋事務所を呼んでみるよりも、直々行つた方が早いと思つたものから」

「いかにも——」

支配人とは違つて、河本警部の顔は、話を聞くとから異常な緊張を見せていた。やがて二人で何かひそひそ

〔著者〕 森下雨村（もりした・うそん）

1890年高知県生まれ。本名・岩太郎〔いわたろう〕。1911年早稲田大学英文科卒。やまと新聞社社会部記者を経て、18年に博文館の雑誌編集者となる。20年に創刊された『新青年』では編集主幹となり、江戸川乱歩や横溝正史などを世に送り出した。作家や翻訳者としても活躍し、別名義を使って少年少女向け探偵小説も多数執筆している。32年に作家専業となり、「一般大衆に喜ばれる軽い文学としての探偵小説」を目指した〈軽い文学〔ライト・リテラチュア〕〉を提唱する。41年頃に高知県佐川町へ戻り、戦後は故郷で過ごした。1965年5月、脳出血の後遺症のため死去。釣り随筆『猿候川に死す』（1969）を遺した。

〔編者〕 湯浅篤志（ゆあさ・あつし）

1958年群馬県生まれ。成城大学大学院文学研究科博士前期課程修了。大正、昭和初期の文学研究を中心に活動している。日本近代文学会、日本文学協会、『新青年』研究会会員。著書に『夢見る趣味の大正時代——作家たちの散文風景』（論創社、2010）、編著に『森下雨村探偵小説選』（論創ミステリ叢書33、論創社、2008）、共編著に『聞書抄』（叢書新青年、博文館新社、1993）などがある。

もりした う そん たん てい し ょう せつ せん
森下雨村探偵小説選Ⅱ

〔論創ミステリ叢書 110〕

2017年12月20日 初版第1刷印刷

2017年12月30日 初版第1刷発行

著 者 森下雨村

編 者 湯浅篤志

装 訂 栗原裕孝

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
<http://www.ronso.co.jp/>

印刷・製本 中央精版印刷

©2017 Uson Morishita, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1670-8